一九四九年北平和平交渉における章士釗

鐙　屋　一

はじめに
一　上海人民和平代表團の成立
二　章士釗の代表團參加の理由
三　上海代表と中共の和平交渉
四　南京政府代表の人選
五　國共和平交渉の經過
六　章士釗の「統一戰線工作」
むすびにかえて

はじめに

一九四五年から一九四九年までの四年間に、戰後中國の政權樹立の中心が國民黨から共產黨へと移行した。人民共和國建國に先立って、政治の舞臺では多くの非共產黨員はあれかこれかの選擇を迫られていた。一九四九年四月、南京政府代表として北平（北京）に赴き、共產黨との和平交渉を行った章士釗(1)の場合は、北平殘留を選擇した。しかしこの選擇は、章士釗が單に國民黨から共產黨に寢返ったことを示すものではなく、國共兩黨の政權構想の轉換と章士釗自身の政治理念との關係から理解されなければならない。理解の鍵は、中國現代政治史に伏在する西歐起源の政治思想の存在である。

非國民黨員の章士釗が政府代表に指名される理由は何か。章士釗が南京政府の和平政策を支持した理由は何か。章士釗が共産黨の下で「統戰工作」に從事する理由は何か。

本稿では、これらの問いに答えることによって、これまで注目されることのなかった章士釗の和平交渉參加の內在的理由を解明し、共産黨、國民黨、章士釗の各々にとって和平交渉とは何であったのかを明らかにし、現代中國における國家建設論上の若干の問題について私見を述べてみたい。

一　上海人民和平代表團の成立

一九四五年から一九四六年までに國民黨が大きな政策轉換を行ったことはよく知られている。抗日戰後の中國では國家建設の方法をめぐり各黨派の角逐が始まった。一九四五年一〇月の國共兩黨の合意（雙十協定）により、戰後の國家建設上の諸問題の解決はきたる政治協商會議（一九四六年一月）での討議に託された。そして政治協商會議の成果である「政協決議」には憲法制定のための國民大會開催が盛込まれた。

だが國民黨にとって國民大會の開催は自らの正統性に關わる問題であった。「訓政時期は、中國國民黨全國代表大會が國民大會を代表し中央統治權を行使する」（「訓政時期約法」第三〇條）。「全國の過半數の省が憲政開始時期に達すれば……、國民大會を開催し、憲法を定め、これを發布する」（「建國大綱」第二三條）。「憲法發布の後、中央統治權は國民大會に歸し、これを行使する」（同第二四條）。すなわち將來の國民大會を代表して統治權を行使するのが國民黨による訓政實施の正統性の根據であった。國民大會の召集、憲法の發布、統治權の返還という憲政移行までの一連の過程は國民黨が主體となって實施しなければならなかった（國民大會路線）。ところが各黨派との平等な政權樹立を志向する「政協決議」方式の國民大會開催（政治協商會議路線）では、蔣介石の指導權は保障されるものの、批判勢力との共存という事態を招くこととなり、それによって國民黨の正統性が侵食される危險があった。したがって當時の國民黨にとっては政治協商會議路

線を國民大會路線に引き戻し、黨の支配權を強化することが急務であった。(2) かくして國民黨は「政協決議」を放棄し、一九四六年一一月、共產黨と民主黨派の多くを排除した國民黨主導の國民大會を開催した。しかし內戰の本格化によって南京政府による憲政の早期實現は困難となった。

內戰では當初國民黨軍が優勢を示したが、一九四七年六月から解放軍の反攻が始まり、一九四八年には形勢が逆轉していた。一九四九年一月までには中共が長江以北の廣大な地域を占領し、解放軍の南京進攻は時間の問題となっていた。ここに國民黨內部から停戰と和平を求める意見が現われ、米國政府がこれに同調した。國民黨は再び政策の轉換を模索し始めた。廣西派の反蔣活動が活潑化し、まず白崇禧が蔣介石に停戰を要求、次いで李宗仁が共產黨との和平交涉案を提出するにいたった。停戰を實現して和平交涉を行い、長江を境界に中國の南半を支配地域として確保する、というのが廣西派の方針であった。(3)

蔣介石は、黨首腦部を召集し意見聽取のうえ、一九四九年の元旦の文告で、共產黨と停戰し平和回復の具體的方法を協議することを表明した。(4) これに對し中共側は一月一四日の毛澤東の聲明で和平交涉實施の八項の條件を提示した。八項とは①戰犯の處罰、②僞憲法の廢止、③僞法統の廢止、④民主原則による一切の反動的軍隊の改編、⑤官僚資本の沒收、⑥土地制度の改革、⑦賣國的條約の廢止、⑧反動分子の參加しない政治協商會議の開催、連合政府の成立、南京國民黨反動政府（および各地方政府）の全權力の接收、である。(5) やがて國民黨內では和平論が主戰論を凌ぎ、一月二一日、蔣介石が引退を宣言し南京を離れ、職權は李宗仁副總統が「代行」することになった。(6) 以後、國民黨の政策は李宗仁主導のもとで和平交涉の實現へと傾斜していった。

中共軍の長江渡河を目前に控える緊迫した狀況下で、李宗仁は中共が政府代表を受け入れるかどうかを確認する事前工作を行なう必要に迫られており、正式な政府代表團を送り出す前に、段階をおって（あるいは使える駒をかき集めて手當たり次第に）中共側との連絡網を築き上げようとしていた。李宗仁は一月下旬、まず黃啓漢（政府立法委員）と劉仲華（華

中剿匪総部参議）を北平に派遣し、葉劍英と接觸することに成功した（劉仲華はのち北平に殘留して章士釗一行を出迎えることになる）。[7]

次に李宗仁は民間人代表團を北平に派遣することにし、まず南京在住の大學教授を構成員とした「南京人民和平代表團」を二月六日に北平へ派遣した。代表團は五日間滞在し、葉劍英ら共産黨側幹部と二度會見したが、[8]南京側はこれを大きな成果とは受けとらなかったと思われる。

南京代表派遣と同時に、李宗仁は上海代表の人選を始めた。まず李の參謀格である甘介侯を上海に派遣し、宋慶齡、陳銘樞、張瀾、張君勱、黄炎培、章士釗、羅隆基らを訪問させた。李宗仁自身も宋慶齡、李濟深、沈鈞儒、章伯鈞、張東蓀、顧孟餘、梁漱溟らに書簡と電報で協力を要請している。[9]

續いて和平推進派の邵力子と張治中が上海を訪れ、民主同盟指導者の張瀾、羅隆基らと協議を行なった。[10]邵力子と張治中は甘介侯と情報交換をおこなったうえ、錢新之（交通銀行董事長）の同伴で杜月笙を訪問して上海工商界の和平交渉についての意見を聴取し、さらに宋慶齡、民社黨の張君勱と相次いで會談した。一方、甘介侯も陳銘樞と章士釗を再度訪問し協力を仰いでいる。[11]

代表團派遣は、流動的な人選と共産黨側の意向との兼合いから、最後まで手探りの狀態で準備が進められた。南京政府が最初に接觸し、協力を要請した顔ぶれを眺めると、大部分が民主同盟の指導的メンバーであることが注目される。中共側との調停役として民盟など第三勢力に頼ろうという南京側の發想は自然なものであった。

だが、政府は民主同盟からの協力を得ることはできなかった。一九四七年一〇月に政府により非合法化された民盟は、國民黨に對してなお嚴しい警戒心を持っており、大方針としてすでに中共との合作が固まっていたからである。民主諸黨派の構成員は中共の要請で、一九四八年末から哈爾濱市・河北省平山縣李家莊などの據點へ移動を始めており、一九四九年三月までに香港から東北、華北に入った民主人士は三五〇人を數えた。[12]北平解放後は北平への移動がなされ、北方の同

志から張瀾、黄炎培、羅隆基ら上海殘留組に對する呼びかけも熱を帶びてきていた。一月二二日、李濟深、沈鈞儒、馬敍倫ら五五人が聲明を出し、中共の指導下で革命を完成し新中國を創設すること、中閒路線の存在は許されないことを訴えた。(13)

民盟のほかに國民黨が呼びかけたのは上海在住の名望家たちであった。一月三一日朝、李宗仁自らが上海へ赴き、顏惠慶、章士釗、冷遹、陳光甫、江庸らの學識經驗者・各界名士（多くは無黨無派）二〇數人と談話會を行ない、協力を仰いだ。政府はこの日の談話會で會見した無黨派の「社會領袖」である、顏惠慶、章士釗、冷遹、陳光甫、江庸の五人に「上海人民和平代表團」を委囑することにした。(14)

顏惠慶、章士釗、江庸は快諾したが、冷遹（江蘇省參議会議長）は議會開會中のため參加不能、陳光甫（重慶上海商業儲蓄銀行、中國投資公司などの經營者）は金融の專門家で政治には疎いという理由で辭退した。(15) その後、代表には凌憲揚（滬江大學校長）、歐元懷（大夏大學校長）、侯德榜（水利公司總經理）らが加えられ、甘介侯と邵力子が同行することになったが、二月七日夜、中共側から章士釗等が私人の資格で來るなら葉劍英が接待するが、甘介侯の北平訪問は拒否するという正式回答があり、(17) 甘の仲介した凌、歐、侯の三人が健康や業務を理由に辭退した。(16)

中共の回答に驚愕した李宗仁は再度上海へ飛んで協議を續け、最終的に顏惠慶、章士釗、江庸の三人を代表とすることで落着した。(18) また邵力子が個人の資格で同行し、連絡役の黄啓漢、張豐胄ら祕書四人、南北通航の任務をもつ金山（共產黨地下黨員）らが隨行することになった。(19)

結局、李宗仁が上海の名望家を集めた談話會が人選の場となった。指名された五人のうち、章士釗と江庸は無黨派、顏惠慶（駐英、駐ソ大使）と陳光甫（國民政府委員）は國民政府の要職にあり、冷遹は民盟常務委員で、中國民主建國會の創設者の一人、一九四五年七月に黄炎培等と延安訪問を果たした親中共派であった。いずれも國民參政會參政員の資格を持ち、共產黨が受入れ可能な人物である。最終的に陳と冷は參加を辭退したので、李宗仁の要請に應えたのは、非民盟の親

國民黨的立場にある社會的名望家（七〇歳前後の國民參政會參政員）であったといえる。

二　章士釗の代表團參加の理由

章士釗が上海代表團への參加依頼を受諾した理由としては、①李大釗、陳獨秀という友人をもつ章にとっては、毛澤東、周恩來といった共産黨の指導者たちとは舊知の閑柄であり、まして「敵」ではなかったこと、②杜月笙などやはり舊知の上海の實業家たちのために中國の將來を占う情報を收集すべく共産黨の實勢を視察する好機會であったこと、③すでに當時から共産黨の祕密黨員が章士釗宅に出入りしており、章と共産黨とはすでにある程度の連絡が可能となっていたこと、がまずあげられる。章士釗の娘の回想によれば、一九四八年から一九四九年初めの章士釗には家人に會わせない來客がしばしばあった。それは章士釗とともに北平に行った金山で、當時は國民黨のブラックリストにも掲載の地下共産黨員だったという。(20)

章士釗が和平交渉の上海代表就任を承諾したもうひとつの理由は、それが自らの政治理念の實現の場だと考えたからだと思われる。

政治協商會議を一ヶ月後に控えた一九四五年一一月下旬、章士釗はこの會議をフランス革命前夜の三部會と對置して捉え、南京政府・中國共産黨・民主諸黨派の三者に對し、三部會の轍を踏まぬよう「調和立國」の精神を發揮すべし、と主張した。(21)

「調和立國」の精神とは、反對意見の存在を許容し、政敵との共存を可能にする政治制度を追求する精神である。それは多元主義的議會政治の確立を主張し、專制と獨裁に反對する、民國初期の章士釗の政治論の一部であり、「調和論」と稱される。(22) 政協會議前夜の章は、「調和論」が必要となる時の再來を感じていた。章は各政治勢力が獨立しつつ協調することを希望し、言論の自由の視點から國民黨の「訓政」を批判し、新たなる「憲政」の時代に大きな期待を寄せた。(23) だが

内戰勃發によって、フランス三部會の例に言及した章の危惧が現實のものとなってしまった。

一九四九年一月、國民黨廣西派が打ち出した和平政策は、章士釗には國民黨が再び政治協商會議路線へと復歸し、他黨派との合作を求めるものと見えたであろう。李宗仁が國民黨内で提起した和平交渉案には、政治犯の釋放、言論集會の自由の承認とともに、上海を自由市とし政府は軍を撤退、各黨派人士が上海で連合政府を設立、國民政府と中共代表が上海で和平交渉を行うことが盛込まれていた。(24) 李宗仁が上海で章士釗らの説得にあたったさいも、これと類似した和平案を提示したはずであり、章としては自己の理念である議會主義政治を具體化する絶好の機會の到來と理解したと考えられる。それはかつて宋教仁の政黨政治論と責任内閣制論を支持した『民立報』期の章士釗の政治論の復活であった。

章士釗は意氣揚々とこの北平行に臨んだ。二月一日夕刻、顔惠慶宅での打合わせ終了後、章は記者團に對し、上海代表の出發はまったく私人が和平を試みる性質のものであり、和平交渉の大計は政府代表に全權がゆだねられるのを待たねばならないと語り、(25) またその翌日、章は『申報』記者に對し、自分は和平のために奔走することを請け負ったが、心中は一枚の白紙であって、いかなる成算もない。北平に赴いてからこの白紙に書かれたことはすべて持ち歸り、當局の參考にしてもらおう、と語っている。(26) いずれにせよ政府代表が正式な交渉の席に着けるようにすることが章士釗の使命であった。

議會主義の主張者である章士釗の政治論の下地には、社會契約論的發想があった。章はルソー『社會契約論』第三編第一一章の後半を引きながら、國家の解散について次のように指摘したことがある。奸惡な權力者がわが總意を奪い、われに自分の意志を捨てて他者の意志に從えと強要するならば、われは社會契約の成立以前の自由を回復して、再び自然狀態へと踏み入るだけである。「したがって國家を解散するとは社會契約を破棄し、もとの自己を回復することである」。(27)

袁世凱死後の一九一六年九月、中華民國再建のための憲法制定會議が開催されたさい、章士釗は「新國家の組織は、昨日すでに出來上がっているというのではなく、まさに今日より始まろうとしているのである。これを繪畫にたとえると、わが國はまっさらな白紙であり、配色も構圖も畫家の思いのままである。……このまさに千載一遇の機會を失ってはなら

ない」[28]と、國家の解散によって政治體制は白紙に還元され、國家建設が再履行されるという自身の政治論を繪畫の比喩をもって表明したことがあった。一九二〇年代の挫折にも關らず、三〇年の時を隔てて章の政治論は一貫している。

このたび上海代表として北平に出發する前夜の章士釗にとっても、一切の國家建設構想は白紙還元されており、いかに國家建設を進めるかは全てが和平交渉から誕生すると理解されていた。章士釗としては一九四六年の政協會議に引き續き、一九四九年の和平會談でこそ「調和立國」の精神を發揮すべきと考えたのではないだろうか。「調和論」において章士釗は次のように說く。「今日の政局の唯一の解決の方法は、機會をみつけて、全國の人の聰明才力を進發させ、情感と利害を融和させて、國憲を規範として、國俗を變容させ、それを共に信奉して、欺きあうことのないようにすることである」[29]。章にとって和平交渉の成功とは合議制という平和的方法による國家統合の實現を意味していた。

「上海人民和平代表團」の一行一九人は二月一三日、國民黨要人の見送りを受け、上海を出發した。空港では記者團に對し、顏惠慶：「中共側に和平交渉の日時を決めさせられたら大成功だ」。章士釗：「今度の旅では和平を呼びかけるほかに、中共側の提案を隨時南京に知らせることとしたい」。江庸：「共產側と協議して南北の通郵問題を解決する」。邵力子：「今回陣笠役をやるのは、まだ政府の代表が行って話をする時期ではないからだ」とコメントした。一行は青島經由で翌一四日午後、北平に到着した[30]。

三　上海代表と中共の和平交渉

北平に到着した代表團一行は、葉劍英（北平市長兼北平軍事管制委員會主任委員）、徐冰（北平市副市長）、連絡役として北平に殘留していた劉仲華らの歡迎を受け、ただちに全員が東交民巷の六國飯店に投宿した[31]。

二月二〇日午後、北京飯店で、林彪、董必武、葉劍英らが民主諸黨派を招待して北平・天津解放の祝宴を開催した。各黨派、各專門分野にわたり四〇〇人餘りが參加し、顏惠慶、章士釗、江庸、邵力子も招待された。まず林彪が發言し、北

平が和平解放された意義、全國の人民の平和への希望、米帝に依存して抵抗する國民黨の陰謀について觸れ、邵力子等に永久の平和のために努力してもらいたい、と述べた。續いて葉劍英が次のような演説をした。和平、民主、統一の新中國の建設が各黨派の目的であるが、その方法には天津方式と北平方式のふたつある。天津方式は、軍事力で反動派の軍隊を粉碎し和平民主統一の障害を排除する方法、北平方式は、談判を通して平和に問題を解決する方法である。このふたつの方法のどちらになるかは國民黨次第であると述べた。(32)

葉の演説は、共産黨の目的はあくまでも中國全土の支配であり、交渉の餘地があるのは、北平方式か天津方式かという、その方法についてであるという立場の表明であった。林彪や葉劍英の語る和平交渉とは、國民黨の和平派が想定している中國の分割支配の條件交渉とはまったく異なるものであったことを示している。

二一日夜、代表團に朗報がもたされた。四代表の石家莊における毛澤東との直接會談が決まったというのである。二二日以降、代表團は石家莊で毛澤東と會見し、周恩來一同とも會談した。會談はなごやかな雰圍氣で行われ、中共側の和平交渉參加者と會談の場所については三月一五日ごろに決定する見込みであると通知された。上海代表團は二四日午後北平に歸ったが、石家莊出發の際、毛澤東の李宗仁宛親書が託された。(33) これがこの代表團の最大の成果となった。

黄啓漢の回想によれば、北平に上機嫌で歸って來た章士釗は次のように述べた。自分は生涯で多くの大人物に會ったが、毛澤東は最も自分を感服させた偉大な領袖である。今度の旅行で得た總體的な印象では平和の障害は南方にあるのであり、北方にあるのではない。(34) 章士釗がこの交渉において中共側に共鳴し、好意を抱いていた様子がうかがえる。

北平での任務を終えた代表團は、二六日中共幹部一同への答禮宴を開き、二七日、葉劍英らの見送りを受け西苑飛行場を離陸した。黄啓漢だけは連絡役として北平に殘った。(35)

一行は、南京到着後、李宗仁への報告と歡迎宴のために三日間南京に滯在し、三月二日、上海に歸った。章士釗はその足で杜月笙を訪ね、會談した。話題は上海の未來、すなわち共産黨が武力攻擊するかどうかが中心となった。翌日晝、杜

月笙は潘公展（上海市參議會議長）、徐寄欣（副議長）、錢新之（交通銀行董事長）ら上海の有力者とともに、自宅で章士釗ら三人の和平代表を慰勞した。『申報』はこの日の三人の口調からは中共が上海を武力攻擊する考えはない模樣であると報道した。(36)

章士釗自身は、北平での感想を『申報』記者に對して次のように漏らしている。

章士釗：和戰の問題に關して中共側の意見はまだ一致していない。おおよそのところ文人は和平論、武人は主戰論である。周恩來は將軍を稱しているが文人たるを失っておらず、彼も和平論である。

記　者：今日の中共はあくまでもマルクス主義を實行するのか、それとも新民主主義を實現するのか。

章士釗：自分はまだ北平に特殊な變化があるとは思わない。物價は南京・上海より高いが、彼らは粟を標準としているので變動は大きくない。そして物資の流通に努めているので物價を下げることができるだろう。

記　者：中共が北平で實施している措置を上海でも採用することができるだろうか。

章士釗：できる。なぜなら北平の措置は溫和なものであるからだ。まだ戶口の調査もしていない。新聞統制に關して、すでに中共支持に態度を變えた新聞の活動をも停止させたことについて訪ねたところ「閒違いであった」という答えだった。……

記　者：傅作義本人の自由の問題はどうか。

章士釗：我々はまだ不自由な狀況を見ていない。傅作義は彼らの宴會に何度も參加している。また自分の北平での行動も自由であった。ただ中共當局は安全のために常に憲兵を派遣して「保護」してくれた。(37)

以上からは、中共軍入城から半月後の北平に大きな變化はなかったことがうかがわれる。また、ここで重要なのは、中共がマルクス主義か新民主主義かという記者の問いに章士釗がふさわしく回答していないことである。當時の流動的な狀況下では、章を含めて共產黨外部からは共產黨の政策方針がどうなっているか捉え難かったとみることができる。

四　南京政府代表の人選

章士釗は三月六日から八日まで再度南京に出向き、程潛（湖南省政府主席）、邵力子、白崇禧、顧祝同らと意見交換を行なった。[38] 章の南京行は政府に和平交渉を督促するためであった。三月七日、章士釗は記者に對し、中共との正式交渉を迅速に開始すべきであって、さもなくば上海和平代表團の中共領袖との意見交換の成果が失われる恐れがある、と語っている。[39] そして章のもうひとつの目的は、程潛に中共側への寝返りを勸める毛澤東の意志を傳えることであった。[40] これが後の程潛の國民黨離脱の伏線となる。

政府代表の人選作業は一月二二日の行政院臨時政務會議ですでに終了しており、邵力子、張治中、彭昭賢、黄紹竑、鍾天心が代表指名を受けていたが、[41] 上海代表團の場合と同様に人選は二轉三轉し、最終的には三月末に張治中（西北軍政長官公署長官、行政院政務委員）、邵力子（國民政府委員）、黄紹竑（戰略顧問委員會委員、監察院副院長、立法委員、國民政府委員）、章子釗、李蒸（三民主義青年團中央幹事、黨中央執行委員）、劉斐（國防部參謀次長、戰略顧問委員會委員）が指名され、張治中が首席代表となった。張治中と邵力子は重慶國共會談代表として「雙十協定」に署名した經驗があった。

章士釗が政府代表に選出された理由としては、二月の上海人民和平代表團の經驗と、その高い社會的知名度、國共和平統一に對する積極性、共産黨側にも歓迎される人物であったことがあげられる。さらに章の指名には黨内環境の變化と何應欽の意向が働いた。

章の南京滯在中に、孫科内閣が總辭職する事件が起こり、これに連座して政府代表に指名されていた鍾天心（水利部長）が代表を辭任した。[42] 彭昭賢（内政部長）は中共の反對ですでに辭職しており、[43] 黄紹竑、張治中も各々代表辭任を申し出て慰留されていた。[44] 政府和平代表團の派遣計畫は頓挫しかけていた。

南京では新行政院長の何應欽を中心に組閣工作が行われた。新内閣は中共との和平交渉を遂行する使命を持つ關係上、

廣く國民黨外からも人材が求められた。上海代表として北平に赴いた實績のある顔惠慶、江庸は高齢と健康を理由に入閣要請を拒否した。[45] 章士釗の場合は、一時司法行政部長就任説が流れたが、章の拒絶により入閣報道は誤報であることが判明した。[46] だがこういった經緯からその後も何應欽が和平交渉の政府代表となるよう章に要請し、章の同意を得て二四日の行政院會議で了承された。[47] 章士釗の參加により代表團の目的達成の可能性が高まった。

章士釗自身は共産黨との和平の成否については樂觀的な見方をしていた。

政府關係者との協議に參加すべく二四日南京に向かう章士釗は、上海驛で次のような談話を行なった。

「黨外人士にも和平代表を委ねる何應欽の今度の要請は、國民黨の雅量を示しており、深く敬服する。このような公平な態度で和平を求めれば成功の希望が大きいと深く信ずる。自分はこの機會を借りて全國人民のために奉仕し、國共代表間の調停役を務めて和平交渉を成功させたいと願っている。」

また、記者の、今度の和平交渉に第三方面の人士が參加するかどうかという問いに對し、「今回は國共間の直接交渉であって他の黨派および民意代表は參加しないけれども、和平が實現すれば、その他の黨派をも含めた政治協商會議を開催するだろう」と答えた。そして章士釗は今回の和平交渉には雙方とも誠意があることを強調し、「個人的見解としては、和平交渉が進行する期間内は共産黨軍は渡江しないと考える」と述べた。[48]

この談話から判明するとおり、章士釗は國民黨の「公平な態度」を評價した。そして交渉成功後に第三勢力の參加する政治協商會議の開催を想定していた。國共内戰を振り出しに戻し、全黨派參加の政治協商會議によって國家建設の再履行を模索するというのが章士釗の構想である。二五、二六日の兩日にわたる政府國防部での會議を終えた章士釗は記者團に對し、雙方とも和平を求めているので自分は基本的には樂觀している、と感想を漏らしている。[49]

一方、中共中央は、三月二六日の北平新華社の放送で、四月一日より北平で交渉を開始すること、周恩來、林伯渠、林彪、葉劍英、李維漢を代表とし、周恩來を首席代表とすること、毛澤東の八項條件を基礎とすることを決定したと通告し

てきた。[50] 二七日、急遽上海に歸る章士釗は、今度の北平行きでは最初に停戰について討論するのかという記者の問いに、變わらぬ樂觀的な口調で「理論上はそうだ」と答えた。[51]

三〇日朝、章士釗は出發のため再度南京入りした。[52] 三一日、代表團の先發隊として盧郁文ら祕書處の人員など計一七人が北平へ向かった。章はあくまでも樂觀的であったが、政府內部はひどく緊迫し悲觀的であった。三一日、顧祝同（參謀總長）が立法院で軍事報告を行い、交渉決裂の場合は、初夏までに兵力四〇〇萬を擁する中共軍が渡江するだろうと豫想を述べ、[53] 同日夜、何應欽の官邸で催された歡送宴の出席者は和平交渉について話題にすることも少なく、總體としては軍事的敗北による講和要求であり、形勢不利であるという認識から、皆重く沈んだ氣分であったという。[54]

各代表はそれぞれが異なる派閥を代表しており、各々の動機と目的をもち、基本的には同床異夢であって一枚岩ではなかった、と余湛邦（張治中祕書）は記している。張治中と邵力子は蔣介石派、黃紹竑と劉斐は廣西派に屬し、李燕は派閥色が希薄で、章士釗はまったく無黨派の「社會賢達」（學識經驗者）であった。余湛邦の觀察では、彼らの和平交渉に對する態度もそれぞれ違っており、章士釗と邵力子は二月に上海人民代表團として北平に行った經驗があり、國民黨のねらう長江を境界とした分割支配を實現するのは不可能であることを認識していたため、南京には歸らない覺悟をしていた。張治中は長期閒中共との和平交渉に從事し、南京側の黨・軍・政の腐敗について知悉していた。道理からいえば考えは決まっており、今度の談判は不可能を實行するのであると出發前に語っていた。だが張は蔣介石との關係が深く、それで分割支配にも固執していた。黃紹竑と劉斐は李宗仁、白崇禧の委託を受けており、當然、分割支配を實現しようとしていた。[55]

五　國共和平交渉の經過

政府和平代表團は、四月一日、南京を離陸、午後北平に到着した。一行は首席代表張治中、代表の邵力子、黃紹竑、章

士釗、李蒸、劉斐、顧問の李俊龍、屈武、祕書の潘伯鷹、余湛邦、陳樹華、蕭錦屏、袁永竹、嚴北溟ら、計一九人であった。[56] 中共側の對應はよそよそしいものであった。空港での出迎えも少なく、かろうじて中共代表團祕書長の齊燕銘、北平市政府祕書長の薛子正らが來ていたが、首席代表周恩來の出迎えはなかった。さらに一行は全員の携行荷物も檢査されたことにも不愉快を覺え、投宿先の六國飯店には「眞の平和を歡迎し、僞の平和に反對する」の標語が貼られてあり、疑念を一層大きくしたという。[57]

一日夜、雙方の協議が行われた。周恩來は始めから嚴しい口調で、張治中が出發直前に蔣介石との協議に赴いたことを非難した。すでに中共には蔣と合作する意志はなく、蔣の引退は僞りで實際は背後で操縱しており、國民黨の和平政策は內戰再開の時間稼ぎにすぎないとも見ていた。こういった中共側の不信感が、南京代表團冷遇の一因であった。[58]

周恩來の要請で黃啓漢が和平交涉の前提となる八項條件受諾の確認のため南京に戻ることになった。その閒政府代表たちは二日から七日まで個別に意見交換を行なった。主に周恩來と張治中、葉劍英と黃紹竑、林伯渠と章士釗、李維漢と邵力子、聶榮臻と李蒸、林彪と劉斐が組になった。八日からは毛澤東が代表全員と個別に香山で會見した。初日は張治中、二日目は邵力子と章士釗、三日目は黃紹竑と劉斐、四日目は李蒸と盧郁文であった。[59]

南京に歸る黃啓漢に對し周恩來は、解放軍が平和への障害を排除するに十分な實力を有することを李宗仁と白崇禧に告げるよう要請し、次の傳言を託した。すなわち①解放軍は和平交涉期閒中は渡江しないが、その後は和平の成否に關らず渡江すること。②白崇禧は武漢で國民黨軍を指揮し、漢口北部より南へ撤退すること。③白崇禧は安徽省安慶を出ること。④李宗仁はいかなる狀況でも南京を離れず、多數の國民黨の人員を南京に留めておき、廣西派の軍隊を南京に進駐させ蔣介石軍の攻擊に備えること。以上の四點であった。三日午後、南京へ歸った黃啓漢は、李宗仁、何應欽と協議し、四日にはアメリカ大使と會見、五日に漢口へ行き白崇禧と會見するなど連絡と調整に奔走した。[60]

共產黨としては內戰はほぼ勝利したと考えており、すみやかな江南接收のため南京・武漢の和平解放を實現すべく國民

黨廣西派を取り込み、さらに廣西派が共産黨と連合し反蔣の軍事活動を行うよう求める政治的工作の機會として和平交渉を位置づけていたことがうかがえる。

黄啓漢の奔走、および李宗仁と毛澤東の電報の往復により和平交渉の條件が整い、「中國人民の解放と中華民族の獨立を基準として、早期に戰爭を終結し、平和を回復する」（毛澤東四月八日）という主旨にもとづき、一〇日中共は軍事進攻の停止を命令した。國民黨側の當面の要求は雙方の停戰であったので、『申報』はこれが代表團の北平での最初の成果であると報道した。(61)

和平交渉の正式會議が中南海勤政殿を會場に二回開催された。第一回會議は一三日夜九時に開會した。中共起草の「國内和平協定」草案を周恩來が朗讀し、南京側はこれを持ち歸り檢討することになり、ただちに閉會した。周恩來提示の「協定」草案は、前文、「戰爭責任は國民黨にある」。第一條、戰犯問題。第二條、僞憲法の廢止。第三條、僞法統の廢止。第四條、軍隊の改編。第五條、官僚資本の沒收。第六條、土地制度の改革。第七條、賣國的條約の廢止。第八條、政協會議の開催、民主連合政府の設立、南京政府の接收。以上八條二四項であった。(62)

一四日、南京側代表團は四〇數件の修正意見を含む修正案を作成、張治中がそれを周に渡し、長時間會談した。國民黨の敗北と共産黨の勝利は必然であるというのが代表團の共通した見解となっていた。(63)

第二回會議は一五日夜九時から開かれた。最初に周恩來が發言を行い、今回の「國内和平協定」は變更不能の決定稿であること、四月二〇日を署名の期限とし、南京政府の同意と署名がなければ、四月二一日にただちに長江渡河作戰を開始することを述べた。周恩來は、さらに修正箇所の説明として、連合政府と軍の整編委員會は雙方の合作とすること、國民黨軍の即時改編を求めること、解放軍が渡江し地方政權を接收することを述べ、次に具體的な修正點が指摘された。そして最後に、人民解放軍の渡江と接收に關しては、協定成立後、長江流域の一〇縣で解放軍が渡江し江南地區を接收する、反亂や協定破壞者は南京政府と共同して平定する、南京政府が署名に同意すれば李宗仁、何應欽、于右任、居正、童冠賢

の五人が北平の署名式に参加する旨が告げられた。(64)

會議終了後、南京代表團は宿舎にもどり検討を續けた。決定稿では修正意見四〇數件のうち半數が採用され、戰犯問題や軍隊改編に關して大きな譲歩を得たことから、最後に皆が「協定」承認で一致した。そこで黄紹竑と屈武（顧問）がこの最終案を南京に持ち歸り、李宗仁と何應欽に受諾を勸告することにした。(65)

一六日、黄紹竑と屈武が南京に飛んだ。署名期限の二〇日までの閒、政府の返答を待つ代表たちの心境について、余湛邦は次のように書いている（引用中の括弧は余湛邦）。

「その數日閒、代表の心境は複雑だった。出發當初の豫想に違わず、任務は異常に困難で、不可能を實行するようなものであった。『國内和平協定』を讀んだ後は、任務をまっとうする可能性はきわめて小さいことがわかった。萬一を願っていた代表たちの心に一種の敗北感が滿ちていた（章士釗先生のような少數者は例外だった）。南京の返答を焦燥して待ちつつ、各人が今後の處世を考え、嚴しい試練に直面していた。(66)」

章士釗は例外だったと余が述べているように、章士釗にとっては南京政府が「國内和平協定」に署名しないことがむしろ不思議であった。李宗仁をよく知る劉斐には李が署名しないことが豫想でき、その旨を章士釗に傳えたところ、章は、元來不利な條件でも署名すると述べていた李宗仁が、條件が大分改善されたにもかかわらず署名しないのは、度胸がなさすぎると憤慨したという。(67)

屈武の回想によると、劉斐が出發前の黄紹竑・屈武に口頭で授けた方策は、第一に、李宗仁、白崇禧、黄旭初の三人の廣西派首領に協定を承認するよう説得すること、この和平協定を拒否することは戰端の再開を意味し、それは國民黨と廣西派の敗北を意味していること、第二に、決然と主戰派を封じ込めること、第三に封じ込めが不可能なら、あらゆる犧牲を拂っても廣西派は連共反蔣の策をとり、共産黨と共に國家建設にあたること、という明快なものであった。(68)

中共側は、國民黨に對する姿勢として、以下のことを考慮していた。背後で實權を掌握している蔣介石は和平協定を受

け入れない。そこで交渉相手を李宗仁に限り、國民黨内での影響力が大きい李宗仁（代理總統）、何應欽（行政院長）、于右任（監察院長）、居正（司法院長）、童冠賢（立法院長）の五人に北平で協定署名をさせ、國民黨内部の分裂をはかる。そして廣西派巨頭の一人黄紹竑は對李宗仁工作に有利、屈武は于右任の娘婿で國民黨元老派の説得に適役、よって黄と屈は南京への連絡役として適任であった。(69) 國民黨首脳部も中共の統戦工作の對象となっており、共産黨の政治的な配慮は重層的であった。

南京に歸った黄紹竑と屈武は「國内和平協定」を示し、交渉經過について報告を行なった。白崇禧は締結に強く反對したが李宗仁は躊躇した。結局、蔣介石の意志を汲んだ國民黨中常會と中央政治會議は、四月一九日、二〇日の協議で、受諾拒否の決定を下した。

李宗仁・何應欽の返電は二一日早朝、北平の代表團に屆いた。電文の要點は、①中共の協定の基本精神は不平等、不合理で、和平交渉の態度ではなく、政府は受諾できない。②中共は人民の利益に基づいて再考慮し、まず停戦、その後和平交渉の繼續とすべきである。中共の「協定」は征服者が被征服者に對する態度であり、二〇日を期限として受諾を求めるのは最後通牒と同じである、というものであった。(70) ここに和平交渉は決裂し、ただちに人民解放軍による長江一帯にわたる大規模な渡河攻撃作戦が開始された。

北平に殘った南京政府代表團にとっては、その後の身の振り方が大きな問題となった。交渉決裂當日の深夜、代表團を慰勞し、專用機で南京へ歸還するよう促す李宗仁と何應欽の電報が屆けられた。南京に歸るか、北平に留まるか。代表團が苦慮した問題であった。

余湛邦によれば代表たちの態度は次の三つとなった。第一は、北平に留まり狀況に應じて和平交渉を繼續する。これは大多數の主張であり、邵力子と章士釗もすでにそう決意していた。第二は、それぞれの理由から、南京、新疆、その他の地に歸るという案であった。第三は、首席代表張治中の意見で、和平交渉が決裂したからには政府派遣の代表團は（少な

くとも首席代表は）復命しに戻るべきだという態度であった。[71]

二四日、南京から専用機が到着した。だが、そのときすでに周恩來の粘り強い説得、中共の援護による家族の北平到着などがあり、張治中も殘留を決めていた。よって何應欽への返書では、任務が未達成であること、共產黨の慰留を受けたこと、あくまで暫時の北平逗留であることが記された。[72] 代表團は全員北平に留まり、專用機で歸還したものは一人もなかった。この後、南京にいた黃紹竑は上海・香港經由で北平に戻った。屈武は新疆の蜂起を援助すべく暫く新疆に歸ることにした。南京政府は、二七日午後の行政院會議で、政府和平代表團の解消を決定し、その旨を宣言した。「政府代表」の名稱を「惡用」されることを防止する處置であった。[73]

六　章士釗の「統一戰線工作」

人民解放軍の長江渡河後、五月二〇日までに南京、武漢、上海、西安、榆林、太原、大同、青島、杭州、蘇州、九江、南昌の各都市が相ついで陷落した。李宗仁は一旦桂林に逃れ、まもなく廣州に移った。

五月一八日、章士釗は邵力子と連名で李宗仁宛ての長大な書簡を書き、中共は大いに讓歩したが國民黨が講和を拒んだと國民黨側の非を指摘し、次のように述べた。「中共の今回の和平論は完全に公（李宗仁）を對象としたものであった。主戰分子については、鎭壓するのであれ、招致するのであれ、公の力を借りてこそ實施できたのだ。」だが「公は私共の意見を採用せず、主戰分子の脅迫と誘惑に負けて翻然と廣州に赴いた」と李宗仁の廣州行きを痛罵し、中共は新民主主義を掲げて連合政府を樹立し、各黨派と討論を行なおうとしていることを強調した。また章は五月二〇日にも、張治中ら代表五人の連名で李宗仁に書簡を出し、上海方面での戰鬪を中止し、速やかに國家の和平統一に協力するよう呼び掛けた。[74]

當時章士釗が從事していた活動はまさに「統一戰線工作」であり、國民黨關係者を説得し大陸に引き戻す任務であった。その手はじめが李宗仁の説得であった。李の歸國は一四年後にようやく實現した。一九六五年七月二〇日、章士釗を

始め、邵力子、黄紹竑、李燕、盧郁文、屈武ら前南京政府代表團が北京空港に李宗仁を出迎え、再會を果たした。(75)

次に章士釗は程潛（湖南省主席）および陳明仁（湖南省政府委員、第一兵團司令官）に働きかけた。一九四九年六月上旬、毛澤東・周恩來の依頼を受けた章士釗は、劉斐とともに香港に赴き、長沙の程潛に書簡を送った。程潛が湖南省で國民政府に反旗を翻し、湖南省を和平解放するように勸めたのである。また章はとくに陳明仁に對し、第一兵團司令としての過去の戰闘は帳消しにするという毛澤東の意向も傳えた。毛澤東自らも程潛に密電で「蜂起」歡迎の旨を訴えた。程潛は同年八月、陳明仁とともに國民黨を離脱した。(76)

毛澤東の要請による程潛・陳明仁の獲得工作に南京政府和平交渉代表の二人が從事したことは、共産黨にとって重要な意味をもっていた。「程潛將軍蜂起」のニュースは新聞紙上でも大いに報道され、新華社は和平代表團が中共起草の「國内和平協定」を受け入れ、その成果として湖南の和平解放を位置づける論評を發表した。(77) 多くの都市は天津方式の武力解放となったが、湖南省の場合は「國内和平協定」を局部的に適用した和平解放の事例としてひとつの模範となった。當時長江以南の國民黨各部隊の將校たちによる對國民黨「蜂起」が增加していた。同じく南京政府代表であった黄紹竑は劉斐とともに、香港に脱出した國民黨の軍政關係の有力者四二人を結集し「蜂起」した。彼らの九月の聲明では國民黨陸海空軍の全將校兵士に對し「程潛・陳明仁兩將軍の義擧」に倣うよう呼びかけている。(78)

章士釗には香港に脱出した杜月笙を説得するという任務もあった。杜月笙の傳記作者は大略次のように香港における章士釗の狀況を記述している。

章士釗は杜月笙宅でしばしば國民黨要人と同席した。たとえば吳開先（國民黨中央執行委員）は、杜に大陸復歸を勸める章士釗に對し、自分は二〇年間共産黨と戰い、そのやり口はよく知っているとし、共産黨は今のところ黨外人士に遠慮しているが、陳獨秀、張國燾、瞿秋白など自らの「元老」や「領袖」でさえ打倒するからには、彼らに隨わない同伴者の黨外人士も打倒されるにちがいないと説く。やがて杜は、章に對する逆説得を開始した。當時共産黨の監視下にあった章

に、杜は臺灣かその他の地への逃亡を勸め、ついに章は杜の熱心な説得に耳を傾けるようになった。

章士釗の香港滯在中、毛澤東が北平で「人民民主獨裁」のスローガンを出した。章はこれについて疑念を抱き、杜宅で王新衡（モスクワ中山大學に留學、軍統に屬し、當時香港で國民黨南方執行部籌備委員）と同席したさい、「民主」と「獨裁」とは兩極端のものだが毛澤東はこれを一緒にしていると述べた。王新衡はこれに對し、共產黨が提唱しているのはレーニンの基本理論にほかならない。英米とは異なり、共產黨の場合は「民主」と「獨裁」は一つになる。口では「民主」をいうが、なすことはすべて「獨裁」である、との見解を語った。續いて杜月笙がソ連に傾倒するより英國に傾倒するほうがよいとし、章にこのまま香港に住むように勸めた。章士釗が杜月笙の説得に迷い出すと、章を監視する共產黨特務が疑念を抱き始め、ある日、章が一人自宅にいるときを見はからい、大陸へ連れ去ったという。(79)

杜月笙の傳記作者が語る香港での章士釗の活動に對する評價は一面的ではあるが、相應の眞實を告げているように思われる。少なくとも章士釗には「人民民主獨裁」に對する疑念があったというエピソードは興味深いものがある。章士釗をも含めた非共產黨の知識人はあくまでも統一戰線工作の對象であったことは注目しておくべきであろう。

一九四九年九月、中國人民政治協商會議開催の直前に章士釗は北平に歸り、第一回中國人民政治協商會議に參加した。この會議には南京政府和平代表の全員が參加していた。

むすびにかえて

共產黨が和平交渉に求めたものは、李宗仁・白崇禧ら國民黨廣西派の獲得であった。それにより北平方式によって江南各地の和平解放を實施する作戰であった。程潛ら國民黨湖南派の獲得によって湖南和平解放に成功したように、李宗仁を第二の傅作義にすることで南京の和平解放を實現し、やがて武漢、上海など局部的な和平解放を達成してゆくこと、つまり戰力の喪失を避けつつ全國支配を達成するというのが共產黨の狙いだった。共產黨にとって和平交渉とは統一戰線工作

の一部であったといえる。政府の代表團人選では中共の承認可能な人材が選ばれ、また中共から代表就任を拒否される例があったなど、そもそも張治中ら代表團自體が中共の統戰工作の對象であったといえる。

國民黨廣西派にとっては、和平交渉に成功すれば、長江以南を支配領域として割據することができ、さらには共産黨との合作により蔣介石派を軍事的に排除する可能性もあると見込んでいた。だが廣西派は、國民黨全體を支配するにはいたらず、黨內分裂を引き起こしてまで和平交渉を完遂する判斷がつかないまま、蔣介石の最終決定により和平交渉は決裂した。

章士釗にとって和平交渉代表となることは自己の政治理念實現の好機會であった。

國民黨は政治協商會議路線から國民大會路線へと路線を變換し、「政協決議」を否定した。國民黨の獨裁強化を狙うこの轉換は、いわば頭數を數える代わりに頭を叩き割る方針への轉換であった。だがやがて戰局の極端な惡化によって和平交渉への政策轉換を餘儀なくされた。章士釗には、限定的ながら、再び頭數を數える方針への復歸、すなわち政治協商會議路線の復活であったと見えたであろう。和平交渉に臨む章士釗にとっては、南京政府の存續ではなく、大同團結による新國家の建設こそが自らの任務であった。これが章士釗が南京政府の代表として和平交渉に參加した理由である。

一方、共産黨の政權構想にも二つの流れが存在していた。ひとつは連合政府論（一九四五年四月）であり、もうひとつは人民民主獨裁論（一九四九年七月）である。連合政府論は、一黨獨裁を否定する複數政黨の連合政權構想で、その精神は「雙十協定」、「政協決議」に反映されている。[80] 人民民主獨裁論は、社會主義建設に先立ち、勞働者階級の指導下での統一戰線による政權樹立を目指す方法で、その構想は「中國人民政治協商會議共同綱領」（一九四九年九月）に貫徹されており、やがて一九五〇年代半ばには、勞働者階級の獨裁が共産黨の獨裁と等質視されてゆくことになる。[81]

軍事的勝利が明白になった和平交渉當時の共産黨の政權構想は、國民黨・民主諸黨派との協力による連合政府論ではなく、「共産黨の指導と人民獨裁の國家權力」を國家建設の條件とする人民民主獨裁論への轉換途上にあった。當時の中共

の構想は黨内でも完全に理解されていたわけではない。まして非黨員で議會主義政治の枠組で發想する章士釗の場合、共産黨の構想（人民民主獨裁論）を連合政府論（政治協商會議路線）として理解する餘地は充分にあった。

二月に上海代表として北上した章士釗は石家莊で毛澤東と會見したが、そのさい中共側の要望として、迅速に新政協を召集し民主連合政府を樹立すること、南京政府は新政協および連合政府の人選に參加し中共（民主人士を含む）と南京政府がこれを協議決定することなどが提示されており、[82] また和平交渉で提示された「國内和平協定」第八條も同趣旨の内容であった。章士釗は中共の政策を、持論の議會主義的政治論と符合した、各政治黨派の合議による國家建設の再履行、つまり政治協商會議・憲法制定・議員選擧・政府發足という計畫であると理解した。これが和平交渉の成否について政府代表のうちただ章士釗のみが始終樂觀的だった理由であった。

きたる中國人民政治協商會議を目前にして章士釗が國民黨關係者に對する政協參加（大陸復歸）の説得に奔走していたさいに、毛澤東の人民民主獨裁論に接して困惑したことが事實であるとすれば、それは、當時の中共の政權構想を、章自身は連合政府論であると見なしていたことを物語っている。「勞働者階級が（共産黨を通じて）指導し、勞農同盟を基礎とした人民民主獨裁」とは「反動派の發言權を奪い、人民にだけ發言權を與えることである」[83] とし、強制勞働や思想改造が方法として組み込まれている毛澤東のヴィジョンは、（エリート主義的で保守主義的ではあるが）多元主義的かつ自由主義的な政治體制を目指す章士釗の政治論とはまったく異質な政治論であったといわねばならない。嚴密に言えば、特定政黨の指導を原則とする統一戰線的な多黨合作ですら、三權分立を前提とする章士釗の議會主義とは異なる思想である。

政治發展のためには反對意見が存在しなければならないという信念、それこそが章士釗の政治論のラディカルな本質である。それは皇帝專制、一黨獨裁といった領袖個人に權力が集中する中國の傳統的な政治秩序觀とは相容れない思想である。章士釗は、一九一四年と一九四六年という異なる時期に、J・S・ミル『自由論』の同一箇所を引用してみせた。すなわち、保守と革新という「これら二つの考え方のいずれもが效用をもっている所以は、相手方に缺陷が存在しているた

めであるが、しかしまた、二つの考え方のいずれにも、理性を失わさせず常軌を逸させないものは、主として相手方の反對というものなのである」[84]と。和平交渉に參加した章士釗を動機附けていたのはこういった自由主義的な信念であった。

獨自の組織とイデオロギー・自前の軍隊と根據地をもつ「政黨」同士の敵對という問題は、武力行使を放棄すれば、公開の自由なる討論で解決できる、と章士釗は樂觀的に捉えすぎたために、そして中共側の政權構想自體が、連合政府論と人民民主獨裁論という二面性をもち、それが渡江攻擊直前の「和平交渉」の席上、狀況的なレトリックをもって描かれたために、章士釗は中共の不透明な論理を誤讀した。だが中共體制下で議會政治は實現困難であることも豫想されていた。

共產黨の主張する「連合政府」の構想がすでに二段階革命を踏まえた人民民主獨裁論の文脈に置き換えられていることを悟ったとき、すでに統戰工作に從事していた章士釗の現實主義的な觀點からは、自己の理念の讓步後退と引き替えに、中共の優遇が保證されている大陸へ戻ることが最善の選擇肢であった。人民共和國建國後は毛澤東の手厚い保護を受け、その後の政治の季節を乘り切ることができたが、最早民初の政治思想を表明することはなく沈默を守り續けた。

一九七三年五月二五日、章士釗（九二歲）は香港啓德空港に降り立った。これが香港に飛來した中華人民共和國の最初の飛行機となった。章の目的は香港在住の親族の訪問であったが、前南京政府代表の章士釗が、毛澤東・周恩來の援助を受け、專用機で香港を訪れたこと自體が、臺灣に對する和平交渉の信號となった。章士釗は「臺灣との和平交渉の使命を帶びている」と香港の各紙が論評した[85]。南京政府代表という章士釗の經歷が波紋を投じた一例である。同年七月章は香港で客死した。郭沫若は「章士釗先生は國家統一の大業のために、勞苦をいとわず、全力を盡くされた。また、終始臺灣省の解放に關心をもち、祖國統一の早期實現を心から待ち望んでおられた」[86]と弔辭を述べた。

章士釗は政協路線の實現を求めて和平交渉に參加したが、交渉決裂と中共軍の江南進攻がその實現を不可能にしてしまった。章の統戰工作參加は、中共指導下での新政協を國家建設の基盤とする次善の選擇であった。やがて人民民主獨裁論の登場が章の政治的理念をさらに後退させたが、その後も國內外の統戰工作の象徵的存在であり續けた。

註

（1）章士釗（しょう　ししょう、Zhang Shizhao、一八八一―一九七三年）は、湖南省長沙の出身。青年時代には華興會會員。英國留學を經て辛亥革命後は『民立報』主筆。袁世凱反對運動に參加し日本に亡命。歸國後は北京大學教授となり、一九一九年の南北和平會議に廣東政府代表として出席。のち段祺瑞政府の司法總長、教育總長に就任。抗日戰中は冀察政務委員會法制委員、國民參政會參政員、戰後は國民大會代表、中國人民政治協商會議代表などに就いた。その多彩な經歷から廣い人脈を持ち、章炳麟・蔡元培・黃興・孫文・袁世凱・梁啓超・李大釗・陳獨秀・段祺瑞・魯迅・杜月笙・蔣介石・毛澤東など中國史上顯著な人物と直接のかかわりをもつ。章の傳記的記述としてはさしあたって、白吉庵「章士釗」（『民國人物傳』第四卷、中華書局、一九八四年三月）、吳相湘「章士釗倡『新舊調和論』」（吳相湘『民國百人傳』（三）、傳記文學出版社、一九八二年一〇月）を參照。また章の人物像に包括的なイメージを與える論考として、高田淳「章士釗について」（『思想』五八九號、一九七三年。のち『章炳麟・章士釗・魯迅』龍溪書舍、一九七四年、所收）がある。

（2）當時の國民黨の政權構想を國民大會路線・政治協商會議路線と概念化し論證した、山田辰雄「平和と民主主義の段階における中國國民黨の戰後政權構想」（『石川忠雄教授還曆記念論文集―現代中國と世界―その政治的展開』慶應通信、一九八二年、所收）に多くを教えられた。

（3）廣西派の擡頭と蔣介石に對する黨內鬪爭については、莫濟傑・陳福霖主編『新桂系史』第三卷、廣西人民出版社、一九九五年八月、第四章を參照。

（4）「總統發表元旦文告　和戰關鍵繫於共黨」『申報』一九四九年一月一日。

（5）「中國共產黨中央委員會　毛澤東主席發表關於時局的聲明」『人民日報』一九四九年一月一五日。

（6）「總統毅然宣布引退　職權交副總統代行」『申報』一九四九年一月二二日。李宗仁の權限に關する李と蔣介石との角逐については、李宗仁『李宗仁回憶錄』廣西人民出版社、一九八〇年一一月、九二二頁、を參照。

（7）李宗仁、前揭、九三〇頁。

（8）「京滬兩和平代表團　明日分自青滬飛平」『申報』一九四九年二月五日。「留平五日數晤葉劍英等　京代表團返抵首都」『申報』一九四九年二月一二日。「以私人資格來平商談國是　南京人民代表團即將南返」『人民日報』一九四九年二月一三日。

（9）「李大總統派甘介侯來滬　邀主和人士入京」『申報』一九四九年一月二三日。「甘介侯自京抵滬　邀孫夫人等晉京」『申報』一九四九年一月二四日。「李代總統昨致電　邀顧孟餘等晉京」『申報』一九四九年一月二五日。

（10）「邵力子張治中　聯袂由京抵滬」『申報』一九四九年一月二五日。

（11）「邵力子張治中　在滬接觸頻繁」『申報』一九四九年一月二六日。

(12) 陳志遠主編『中國民主黨派史』天津大學出版社、一九九三年九月、二一八―二一九頁、二二七―二二八頁。

(13) 「李濟深等五十五人　發表時局聲明　支持毛澤東八項條件」『申報』一九四九年一月二四日。

(14) 「李代總統一度莅滬　訪孫夫人及何應欽後乘飛行機返京」『申報』一九四九年二月一日。

(15) 「京滬兩和平代表團　明日分自青滬飛平」『申報』一九四九年二月五日。

(16) 「上海代表團人選決定　任務爲和談敲門」『申報』一九四九年二月六日。

(17) 「顏惠慶等赴平商談問題　中共昨有正式答覆」『申報』一九四九年二月八日。「中共電臺廣播原文」『申報』一九四九年二月八日。中共の甘介侯拒否の理由は「中共發言人聲明和平談判準備工作尚未做好」『人民日報』一九四九年二月九日を參照。

(18) 代表になった顏惠慶（一八七七―一九五〇年）は、アメリカ留學の經驗をもつ上海出身の外交官で、北洋政府の外交部次長、總長、內務部總長などを歷任、段祺瑞失脚後の一九二六年には國務總理として、大總統の職權を代行した。南京政府成立後は、駐英、駐ソ大使、國際連盟大會出席の首席代表となり、抗日戰爭開始後は、國民參政會參政員、國民政府委員、立法院立法委員を務めた。また江庸（一八七七―一九六〇年）は、福建省長汀の出身、早稻田大學卒業後、京師法政專門學校校長、京師高等審判廳廳長などをへて一九一七年には司法總長となり、その後、修訂法律館總裁、北京法政大學校長、朝陽大學校長、故宮博物院古物館館長などを歷任した。

(19) 「滬代表團今晨飛平」『申報』一九四九年二月九日。張豐胄「一九四九年國共和談的有關史料」『文史資料選輯』第三二輯、七二頁。黃啓漢「一九四九年〝和談〟的回憶」『文史資料選輯』第六七輯、一六頁。

(20) 章含之「我與父親章士釗」（戴晴・鄭直淑・章含之『梁漱溟、章士釗與毛澤東』香港達藝出版社、一九八八年一〇月）四二頁。

(21) 章士釗「政治協商會議」『申報』一九四五年一一月二五日。

(22) 秋桐「調和立國論上」『甲寅』雜誌、第一卷第四號、一九一四年一一月一〇日を參照。章士釗の政治思想については、拙稿「民國初期における章士釗の議會主義政治論」『史境』第一七號、一九八八年一〇月、を參照。民初の調和論については、丸山松幸「民國初年の調和論」『關西大學中國文學會紀要』第二號、一九六九年三月、を參照。

(23) 章士釗「專論　釋言論自由」『申報』一九四六年一月二日。

(24) 申曉雲・李靜之『李宗仁之一生』河南人民出版社、一九九二年、二九八頁。

(25) 「顏惠慶等五代表　赴平行期尚未定」『申報』一九四九年二月二日。

(26) 「甘介侯奉命再度來滬　敦促顏惠慶等赴平」『申報』一九四九年二月三日。

(27) 秋桐「國家與我」『甲寅』雜誌、第一卷第八號、一九一五

年八月一〇日、五頁。

(28) 秋桐「理想之一院制」『甲寅』日刊、一九一七年二月一九日（章士釗『甲寅雜誌存稿』上、文海出版社版、一九七七年、一六頁）。

(29) 秋桐「調和立國論上」前掲、二八頁。

(30) 「顏惠慶等一行抵青島　今日繼續飛赴北平」『申報』一九四九年二月一四日。「顏惠慶邵力子一行　自滬經青飛抵北平」『人民日報』一九四九年二月一七日。「李代總統對監委表示」『申報』一九四九年二月一五日。張豐胄「一九四九年國共和談的有關史料」『文史資料選輯』第三二輯、七二頁。

(31) 黃啓漢「一九四九年〝和談〟的回憶」前掲、一六頁。

(32) 張豐胄「一九四九年國共和談的有關史料」前掲、七三頁。

(33) 張豐胄、同上、七四―七五頁。「顏惠慶邵力子等四氏抵石家莊　毛主席周恩來將軍予以接見　傅作義鄧寶珊同來接洽公務」『人民日報』一九四九年二月二六日。

(34) 黃啓漢「一九四九年〝和談〟的回憶」前掲、一七頁。

(35) 「李濟深等一行　廿五人抵北平」『申報』一九四九年二月二七日。張豐胄「一九四九年國共和談的有關史料」前掲、七五頁。

(36) 「顏惠慶在機上告吳市長　與他談上海問題」『申報』一九四九年三月三日。「上海爲全國精華所在　共軍不致襲攻」『申報』一九四九年三月四日。

(37) 「章士釗談北平情形」『申報』一九四九年三月五日。

(38) 「京滬區控制權問題　將成和談要題之一」『申報』一九四九年三月七日。「政府和談代表　鍾天心辭職　章士釗昨夜離京返滬」『申報』一九四九年三月九日。

(39) 「今日立院將有質問戰　決定孫科內閣命運」『申報』一九四九年三月八日。

(40) 唐純良主編『中共與國民黨地方實力派關係史』人民出版社、一九九五年二月、二二九頁。

(41) 「折衝和平代表人選」『申報』一九四九年一月二二日。「政院昨開臨時政務會議　推定和談代表團」『申報』一九四九年一月二三日。

(42) 「政府和談代表　鍾天心辭職　章士釗昨夜離京返滬」『申報』一九四九年三月九日。

(43) 「關於南京僞行政院重新決定　派代表向中共進行談判問題　中共發言人發表談話」『人民日報』一九四九年一月二六日。國民黨「CC」系の主要幹部であるというのが共產黨の彭昭賢參加に反對する理由であった。

(44) 「張治中辭和談代表　俟在蘭公畢將赴新疆一行」『申報』一九四九年二月一二日。「李代總統定明晚廣播　重申政府謀和決心」『申報』一九四九年二月一三日。

(45) 「在滬初步接合告段落　何院長定今晨晉京」『申報』一九四九年三月一五日。

(46) 「新內閣可能一新耳目　何應欽奔走組閣中　司法章士釗正副祕長黃少谷倪炯聲」『申報』一九四九年三月一七日。「政院組織法或將覆議　新閣組成可能有待」『申報』一九四九年三月一八日。

(47) 「增加和談代表名額　今日首次政務會可決定」『申報』一九四九年三月二四日。張治中「北平和談前的幾個片斷」『文

史資料選輯』第一三輯、四頁。

(48) 「政府和談代表決定　即日舉行會商討論和談程序問題」『申報』一九四九年三月二五日。

(49) 「和談四一在平開始　政府代表期前啓程」『申報』一九四九年三月二七日。

(50) 同上。

(51) 「政府代表定期飛平　準備充足資料不携方案」『申報』一九四九年三月二八日。

(52) 「和談代表增一人　加推劉斐着重軍事商談」『申報』一九四九年三月三〇日。

(53) 「和平代表團祕書處人員　盧郁文等今飛平」『申報』一九四九年三月三一日。「中共軍現有兵力　總數約四百萬人」『申報』一九四九年三月三一日。

(54) 余湛邦「一九四九年國共北平和談始末記」『文史資料選輯』第六七輯、五三頁。交渉に參加した余湛邦の回想錄は當時の政府內部の議論、代表團の狀況をよく傳えている。「始末記」は加筆訂正され余湛邦『張治中與中國共產黨—張治中機要祕書回憶錄』（中共中央黨校出版社、一九九一年一〇月）、余湛邦『張治中—張治中機要祕書的回憶』（吉林文史出版社、一九九二年八月）に收錄された。

(55) 余湛邦「一九四九年國共北平和談始末記」同上、五五頁。

(56) 「政府代表飛平　和談之幕正式揭開」『申報』一九四九年四月二日。

(57) 余湛邦「一九四九年國共北平和談始末記」前揭、五六頁。

(58) 余湛邦、同上、五七頁。

(59) 余湛邦、同上、五八頁。

(60) 黃啓漢「一九四九年〝和談〟的回憶」前揭、二六—三二頁。

(61) 「代總統致毛澤東電」『申報』一九四九年四月九日。「毛澤東電覆李代總統　說明和平談判標準」『申報』一九四九年四月一〇日。「李代總統接獲平電　中共下令停止進攻」『申報』一九四九年四月一一日。

(62) 余湛邦「一九四九年國共北平和談始末記」前揭、七〇頁。

(63) 余湛邦、同上、七三頁。

(64) 余湛邦、同上、七四—七六頁。「和平協定」は「國內和平協定（最終修正案）全文」として四月二二日に『人民日報』紙上に發表された。「國內和平協定」の修正內容については、楊圭松『失去的機會?—戰時國共談判實錄—』廣西師範大學出版社、一九九二年一二月、二九四—三〇〇頁、を參照。

(65) 余湛邦、同上、七九頁。

(66) 余湛邦、同上、八〇頁。

(67) 劉斐「一九四九年北平和談的片斷」『文史資料選輯』第三二輯、一〇五頁。

(68) 王序平・劉沈剛『劉斐將軍傳略』一二八—一二九頁。

(69) 余湛邦「一九四九年國共北平和談始末記」前揭、九〇頁。

(70) 「政府拒絕中共要求」『申報』一九四九年四月二一日。

(71) 余湛邦「一九四九年國共北平和談始末記」前揭、八四—八五頁。

(72) 「和談代表團未能南返　行政院宣布眞相」『申報』一九四九年四月二九日。

(73) 「對中共區郵局匯兌　政院決一律停止」『申報』一九四九年四月二八日。

(74) 王序平・劉沈剛『劉斐將軍傳略』前掲、一六七―一六八頁、一七二頁。張豐胄「一九四九年國共和談的有關史料」前掲、六九頁。「邵力子章士釗致李宗仁信」『文史資料選輯』第三二輯、八五―九一頁。

(75) 程思遠『李宗仁先生晩年』文史資料出版社、一九八〇年一二月、一九〇―一九一頁。

(76) 章含之「我與父親章士釗」前掲、四四頁。李揚・吳志葵「毛澤東和中華人民共和國的創建」『淮北煤師院學報（社科版）』一九九一年三期（中國人民大學複印報刊資料『中國現代史』一九九一年一期、一七五頁）。唐純良主編『中共與國民黨地方實力派關係史』人民出版社、一九九五年二月、二三三、二三五頁。

(77) 「接受國內和平協定宣布脫離反動集團　程潛陳明仁率部起義　華中我軍解放長沙」『人民日報』一九四九年八月六日。「新華社時評　湖南起義的意義」『人民日報』一九四九年八月二六日。

(78) 王序平・劉沈剛『劉斐將軍傳略』前掲、一四四―一四五頁。

(79) 以上の記述は、章君穀著、陸京士校訂『杜月笙傳』第四册、傳記文學出版社、一九八九年六月再版、一九九―二〇七頁による。なお杜月笙は一九五一年香港で逝去した。

(80) 「連合政府論」が三權分立の議會政治を採るブルジョア民主政體（舊民主主義の性質の政權）を目指したものであるとする見解については、彭煥才「評抗戰勝利前後中共關于〝聯合政府〟的主張」『湘潭大學學報（社科版）』一九九一年第二期（中國人民大學複印報刊資料『中國現代史』一九九一年第六期）を參照。

(81) 四九年の「共同綱領」（新民主主義）とたとえば五四年「憲法」との相違面（新民主主義の放棄、獨裁強化）を強調して理解する考え方がある（天兒慧「『新民主主義共和國』の展望と挫折」宇野重昭・天兒慧編『二〇世紀の中國――政治變動と國際契機』東大出版會、一九九四年三月、所收）が、ここではむしろ「連合政府論」（一黨獨裁の否定）と「共同綱領」（人民民主獨裁）との相違を意味あるものと考えたい。

(82) 楊圭松『失去的機會?』前掲、二八四頁。

(83) 毛澤東「人民民主主義獨裁論」一九四九年七月一日、『新中國資料集成』第二卷、日本國際問題研究所、一九六四年、五三一、五二六―五二七頁。

(84) 秋桐「政本」『甲寅』雜誌、第一卷第一號、一九一四年五月三日、九頁。章士釗「專論　釋言論自由」『申報』一九四六年一月二日。章は嚴復譯『群己權界論』を引用するが、ここでは鹽尻公明・木村健康譯、岩波文庫版、一九七一年、九七頁による。

(85) 章含之「我與父親章士釗」前掲、九八―九九頁。

(86) 「首都學行章士釗先生追悼會」『人民日報』一九七三年七月一三日。

the weakened hong merchants 行商, who under this scheme were to deal exclusively in the legitimized opium trade. Thus this proposal, which sought to reconstruct the Canton system, was intended essentially to benefit local society in Canton.

On the other hand, authorities in Peking were seriously alarmed by the northern voyages of the opium-ships, being connected with distribution of religious tracts by foreign missionnaries. The authorities in Peking were temporarily inclined to accept this proposal because it was planned to put an end to the northern voyages of the opium-ships.

ZHANG SHIZHAO 章士釗 AND THE PEACE NEGOTIATIONS IN BEIPING 北平, 1949

ABUMIYA Hajime

In April 1949, Zhang Shizhao (1881—1973) went to Beiping as a delegate of the National Government and took part in the peace negotiations with the CCP, and came to choose a policy of nation-building under the regime of the CCP after the negotiations had broken down. On the level of personal political belief, he came to support the National Government's policy for peace, and also to support the work of the United Front under the CCP.

In the eye of Zhang, who was an advocate of parliamentary politics from the early Republican period onward, the peace policy of the KMT meant a shift of political line from the National Assembly to the Political Consultative Conference, and that policy was suitable for his political idea. As a result, he accepted an appointment to become a peace delegate for the National Government.

Zhang engaged in the work of the United Front under the CCP, because he mistakenly interpreted the fluid policy of the CCP in 1949 as a policy of Coalition Government which was outlined in 1945. As such, Zhang believed, this would mean a realization of the Political Consultative Conference in which all political parties in China could participate, including the peace faction within the KMT.